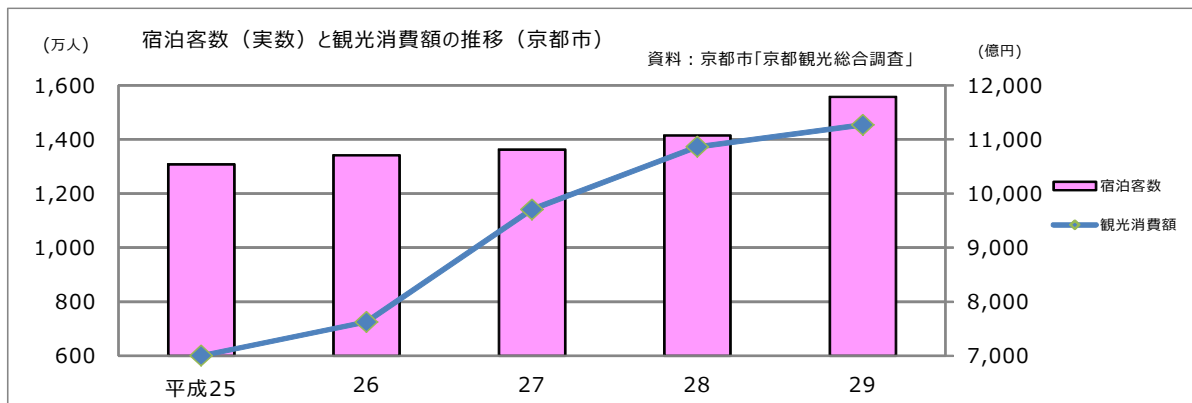


4 コラム

住んでよし、訪れてよし ～市民生活と観光の調和～

イギリスの有力旅行雑誌である「Wanderlust（ワンダーラスト）」の読者投票（ベストシティ部門）で2年連続の1位、また、世界で最も影響力のある旅行雑誌の一つである「Travel+Leisure（トラベル・アンド・レジャー）」の人気観光都市ランキングで7年連続のベスト10入りなど、観光都市として確固たる地位を築いている京都。平成29年には、外国人宿泊客数の大幅な増加等によって、過去最高となる1,557万人もの宿泊客をお迎えしました。観光消費額も過去最高の1兆1,268億円となり、これは京都市民の年間消費額78万人分に相当します。また、この観光消費額を生み出すために必要な雇用は、直接・間接を合わせ13万6千人と推計され、これは京都市の総従業者数（約74万人）の18%相当であり、雇用の観点においても観光が欠かせないものとなっていることが分かります。



では、観光が盛んになることは良い面ばかりでしょうか。こんな調査結果もあります。

本市が毎年行っている「市民生活実感調査」において、「京都は、市民にとって暮らしやすい観光都市である」という設問に対し、「どちらかと言えばそう思わない」又は「そう思わない」と回答する方の割合が増加傾向にあります。背景として、公共交通の混雑や観光客のマナー、違法民泊等が考えられます。

観光のために、そこに暮らす人々の生活が脅かされてはいけません。けれども、せっかく京都を訪れる皆様はおもてなしの心でお迎えし、京都ならではの文化などに触れていただきたい・・・

「京都は、市民にとって暮らしやすい観光都市である。」という設問に対し、「どちらかと言えばそう思わない」又は「そう思わない」と回答した方の割合

H26	H27	H28	H29	H30
13.1%	20.1%	16.9%	22.7%	23.7%

資料：京都市市民生活実感調査

京都市では、住民、観光客の双方にとって良いまち（住んでよし、訪れてよし）を実現するため、さまざまな取組をスタートさせています。

（具体的な取組事例）

- ・市バスの混雑対策
（前乗り後降り方式導入など）
- ・違法、不適切な民泊に対する指導の強化
- ・Webサイト等によるマナー啓発の強化
- ・公衆トイレ洋式化等整備
- ・無電柱化事業
- ・交通バリアフリー化対策
- ・文化財の保全、継承

これらの取組には、宿泊者の皆様からいただく宿泊税を活用しています。

一見、観光振興のための取組のように見えるものも、公共交通の充実や安心安全な環境の整備など、市民生活の向上と密接につながっています。

京都は多くのものを取り入れて、独自のものを生み出してきたまち。これからも観光を通じて人と人、文化と文化が交流するまちづくりを推進していきます。